

ホームレス問題を考える 5

子どもたちはなぜ、ホームレス者を襲撃するのだろうか？

～ホームレスを生み出す社会の問題点とその解決に向けて～

事件は1983年2月5日、横浜市で起きました。山下公園で野宿生活をしてきた須藤泰造さんが市内の少年ら(14、16歳)10人から、殴る、蹴る、拳銃ゴミかごに入れられ引きずり回されて死亡。それは「横浜浮浪者殺傷事件」として、社会に衝撃を与えました。それ以降、子どもたちによるホームレス襲撃事件は後を絶ちません。北九州ホームレス支援機構の調査でも37%のホームレス者が何らかの被害にあったという結果が出ています。

子どもたちがなぜホームレス者を襲うのか、その背景には何かあるのかを、14年前からその問題に関するルポを続けている北村年子さん、NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長奥田知志さん、グリーンコープ共同体代表理事田中裕子さん、三者による鼎談をとおして、考えてみます。

ホームレス襲撃といじめは、社会的な問題

奥田 1983年の事件の被害者は、「浮浪者」日雇いの労働者だった。そこにあったのは下層労働者を取り巻く構造的な問題でした。北九州ホームレス支援機構も当初は、「北九州日雇い越冬闘争実行委員会」と名乗り、活動をしていました。社会の変化と共に野宿者が増加する1990年代以降にホームレスの問題が社会的なテーマとなりました。私が初めて「ホームレス問題」は「ホームレス問題だ」と書いたのが1992年でした。

田中 昔から確かに「浮浪者」と呼ばれる人が私たちの日常生活の中にもいましたが、無視することはありませんでした。物乞いをする人たちに物をあげたりして。今思えば、地域の中で一緒に生きていたような気がします。

北村 私は子どもの問題を取材する中でホームレス問題に つながりました。いじめが社会的な問題となった契機は、事件は1986年、中野区の中 学2年生だった鹿川君の自殺です。子どもたちの力の発散 は、はじめは暴走族や校内暴 力など大人や権力に向かって いましたが、その後家庭内暴

力へ。弱いものへと対象が変 わってきた。ホームレス問題 に関心がない人でも、子育て の親にとつて、子どもたちが いじめも加害者になってきた 「ホームレス」襲撃は、路上 のいじめに他ならない。ホー ムレス問題は、教育・子育て の問題と直結しています。鹿 川君は1972年生まれ、団 塊の世代の子供たちです。特 徴が「助けて！」を言えない、 自分の弱さを外に表わせない まま、孤立してしまっ

奥田 50、60歳代のホーム レスもまた「助けて！」が言 えないうえ、なぜなのか。そ の根っこに地域のセーフティ ネットが喪失してしまっ ているのではないだろうか。

北村 多様な地域性、不完全 性を受け入れられる関係性が なくなってきた。つまり、子 どもが変わったのではなく、 地域・社会が変わったので はない。はじめは、被害者、加害者 がいて、観客がいて、さらに 無関心な傍観者がいる。これ をいじめの四重構造と言いま す。これこそが今の社会の縮 図と言えるでしょう。



左から北村年子さん、奥田知志さん、田中裕子さん

大人だって、子どもだって、つらい…今を生きるって



北村 横浜の事件の被害者須藤さんの言葉は鮮烈です。夫婦で支えあって切り盛りしていたのに、ある年の初めに過労で奥さんが亡くなり、そこから人生が変わっていったんです。最愛の妻が心の支えだった。誰にでも「心の支え」が必要、「この人のために生きていく」という気持ちがないと、人は脆く崩れます。

奥田 北九州大学が行った調査があります。自分が社会にとって必要存在であるか、即ち「自己有用感」に関する調査です。一般市民13%、野宿者16%。しかし、自立後に調べてみると10%まで落ちることが判明しました。自立することによって社会に対する信頼は増すのですが、自己有用感低下するという感覚の低さに驚きました。「社会」ではなく、「家族」や「子ども」に対する数字はまた違ってくるのではないかと思います。

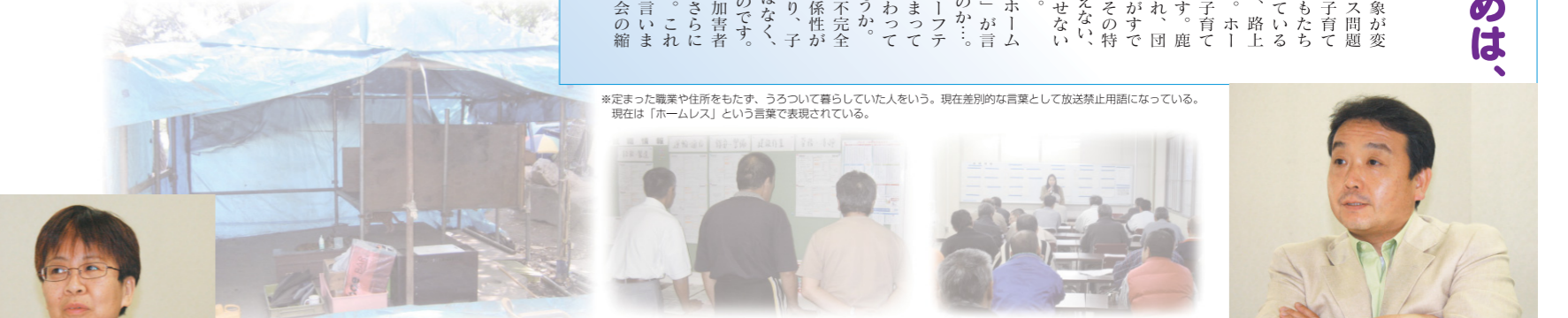
奥田 以前、支援機構のホームページに書き込みがありました。「生産性のない人間が迫害を受けたり差別されるのは当然だ、そこに下手に餌を与えたりするから、屑にな

る。」襲撃事件の背景には、「生産性」という自己有用感の根拠をめぐり切迫感があるのではないかと思います。これが社会を縛り付けている。

北村 先日、たまたま熊本で乗りあわせタクシーの運転手さんが上野でホームレスをしていたという人でした。ホテルの支配人にまで上り詰めたものの、パブルがはじけ突然解雇、ホームレスに。ある日、上野のベンチに座っている自分を探しに上京していた両親が目の前に立っていた。みづもなくて田舎には帰れなかつたのだと話してくれました。実家がなくてもホームレスになったり、自殺するのは圧倒的に男性が多い。これは日本特有の家長制の悲劇です。

奥田 今の社会に蔓延している新自由主義の自己責任論と安心・安全論というものが大いに問題があります。自分のことしか守らない社会ではなく、それを普遍化することが大事。

田中 グリーンコープでも食べものの安心・安全を言っています。その根底にあるのは「生命」です。生命を守る運動は食べものだけではなく、「生きる」すべてに貫かれています。私たちはそれを、グリーンコープの中だけではなく、地域の中に根付かせていくことをめざしています。



※定まった職業や住所をもたず、うろついて暮らしていた人をいう。現在差別的な言葉として放送禁止用語になっている。現在は「ホームレス」という言葉で表現されている。

子どもたちと「ホームレス」が出会う生命の授業

～ホームレスの「生きる」に、感性が揺り動かされる子どもたち～

事例 かつてガイドマンとして働いていた鈴木安彦さん(64歳)は、脳梗塞で倒れた後、ホームレスに。段ボールを集めて生計を立てている。リヤカーに満載した段ボールの価格は100円、1個45円のインスタントラーメン2個が1日の食費。そんな鈴木さんを少年たちが暴行して額をエガガで襲った。しかし、警察は取りあわない。

北村 この鈴木さんを取材した「ホームレス問題の教材ビデオ」を中高生に見せて話をしました。襲撃する少年たちは「ホームレスは社会の屑のような存在、弱い人間は生きる価値なんかない」と言う。生徒たちは「鈴木さんは弱い人じゃない、強い人だ」「自分の悩みなんか小さい」と「ホームレス」の生き抜く強さに驚かれました。そして、生徒たちは野宿者への共感・理解を深める一方で、襲撃する子の気持ちも分かるというのです。

事例 元ホームレス者の話。自分で何とか生きていこうと頑張ったけどだめだった。「もう死ぬしかない」。でも怖くて死ぬ状態でもまよっていたら、誰かが救急車を呼んで助けてくれた。気が付いたら病院のベッドの上。看護師さんやお医者さんが診てくれる。役所の人に来て生活保護の手続きをしてくれる。その時思った。助けてくれる人がいるんだ。「助けてくれ」と言えた日。「助けた」と言えた日。

奥田 北九州市小倉北区の学校をとおして呼び掛け、集まった20人の子どもたちとホームレスから自立した男性との交流の場をつくりました。「君たちも助けてほしい時は助けて！」と言えはいいんだよ」と子どもたちに伝えると、子どもたちも自ら、毎日とても頑張っているから、その言葉が心に響くんです。小学4、5年生が対象でしたが、この言葉に子どもたちの感じることは大きいものがありました。

北村 多分どんなに苦しくても、生きていくことをあきらめない。不完全でもみづもなくても、炊き出しに並んで生きていくたくましさ。「弱いままでも生きる」という強さを持つているホームレスから学ぶことがたくさんあります。「可哀そうだから助けてあげる」ではなく、「自分がどうい状態になったら」と想像してほしい。

田中 ホームレスは受け者だといふ捉え方をしている人が少なくありません。そんな中で何を訴えていくか。物質的には豊かだけど、子どもは幸せなのかと、悩んでいるお母さんも多い。生き抜くことを教えることは大事。「助けてあげよう」、そう呼びかけていきなさい。

北村 そのためには、まずは出会うこと、意識を変えるには出会うこと。出会ったら、昨日までの無関心な「運行人の私」ではなく、奥田「支援」とは、出会いからはじまります。出会うことが、学ぶことで自分のあり方が変わる。同時に「私の問題だ」ということに気づく。これは「自分に対する支援」「将来的な自分につながる支援」なんです。

抱擁館は 生き生きする場所へ



北村 子育ては家族だけではできません。近所のおばさんやおじさんなど「道親さん」に見守ってもらってはじめて、子どもは一人前になるのです。お母さんも自分ひとりで頑張らないで、地域の「道親さん」を頼ってほしいのです。

奥田 必要なのは、北村さんの言う「道親さん」の概念です。多くの野宿者が無縁仏で葬られているが、少なくとも支援機構では、支援者という家族が看取ります。地縁血縁を越えて関係があった人たちは、涙を流してその人の死を受け入れます。旧来の家族を越えて、誰でもどこでもホームになれる、家族になれる。そんな創造性を持ちたい。

北村 悲しい、苦しい、つらいが言えず、生きていくのがつらい時に弱く向くのではなく、つらさを分けあうホームづくりが必要です。子どもも親も負の感情を出せることなく、地域の中に根付かせていくことをめざしています。

奥田 これまでの地域は地縁血縁の世界だった。それを越える地域、そんな地域の枠組みの中で子どもたちをどう育てるか、そこで「抱擁館」がどういう役割をするのか、真剣に向きあっています。それが私たちの課題です。

抱擁館は 椅子を取りあうのが椅子取りゲーム(競争ゲーム)ですが、逆に誰もあふれることなく椅子に座れるようにするためにどうすればいいのか、というゲーム(協力ゲーム)を子どもたちとします。すると、少なくともお互いに椅子に子どもたちはお互いにしがみつくとともに座る。そのようすは、まさにワークシエリング、助けあいです。

田中 いじめもホームレス問題も、生命が危険に晒されていることがつらいですね。誰の生命も大事にされなければなりません。生命を原点にした運動は今や「抱擁館」をとおして地域の創出へと向かっていこうとしています。